る時爐中を見入て火相に心を付、扨炭を次たるを見て、其座延縮め、火の移りを急ぎ、又は移りを遠くする等の主の心遣に感を起し、挨拶しける事成を、偏に炭を饗膳のもり形のやうに心得、主も夫を專らに置ならべ、客も其盛かたを見物して、炭出來不出來を挨拶する事、大成ひが事なり、然共根本露地の茶の本意、湯相火相三炭の次第をもわきまへぬ輩は、さこそ有べけれ、

〔細川茶湯之書下〕一亭主火をなをしによる時、そさうに見によるべからず、釜をあげて、ふくべの上なる火ばし羽箒をおろし、ほこりなどをはらひて火ばしに取つくを見て、相客衆へうかゞひ合、そろりとにじりより、炭置を見べし、たゞ感じて置べし、所をさしてほむるは惡し、功者より炭はい爐中五德にいたるまで、どこもなしにほめて、かけぬさきに釜を見てのくべし、すみ不出來なれば功者もほめず、感じてきれいなる體をほめてすます也、惡をほめらるれば、ほめられぬよりをとり也、但一口すみをなをす時は見によらず、亭主のきて一人宛見る、のかずば所望してのくる也、

〔茶道織有傳上〕客入の大體

亭主茶たて口をあけ、たがひに一禮し、扨大目へ入、ふりかへり炭取を入、跡を去め、釜をあげ、頓而炭おかんとする時、客をの〳〵うち寄、手をつきて爐中を見る也、よき程に炭をほめ、薫物を爐中に入、香箱のふたをする時、香箱をのぞむ也、上客一禮して順々見て、初亭主出したる所に置也、

〔南方錄三〕懷石號

懷石

懷石は禪林にて菜石と云に同じ、温石を懷にして懷中をあたゝむる迄の事なり、禪林の小食夜食など、菜石共點心共云同意なり、草庵相應の名なり、わびて一段面白き文字なり、

〔茶話眞向翁坤〕茶湯の獻立を懷石とかく事、其文解せざるを以て會席と書す、是もおもはしからずとて、會膳獻立料理など去るす人あれど、猶懷石と書べし、此字もと禪語なりときけり、